

上代における否定表記の一特質

山 崎 正 之

最近における我国の上代文学への中国文学の影響に関する調査はますます精密の度を深めて来てゐる、やがてそれらの事柄から上代知識人たちの精神構造を明らかにする一つのてだてを得ることが出来るであらうと思はれる。

ところで、これまでの多くの研究が漢籍の知識に集中してゐる傾向があり、ために当時の俗語小説類・話し言葉から受けたであらうことどもに就いてもなほ同様の注目をする必要のあることが云はれて来た。

既に神田喜一郎博士⁽¹⁾や小島憲之博士⁽²⁾らによつてそれらの点も次第に拓かれ、その様相を明確に示し始めて来てゐるといふ段階である。そして両者の研究の結びつきにおいて検討されるのでなければ、かうした方面からのアプローチとして正当な判断に到達することは困難ではあるまいかと考へる。

諸先学の驥尾に付して、私も一二さうした事柄を取り上げてみて、と思ふ。

—

以前に吉川幸次郎博士は「中国語に於ける否定の強調」⁽³⁾の中で、

現代中国語の語法の一つに「不(pu)」とか「没(mei)」とかを
使つて簡単に打消すほかに、「すべて」といふ觀念を表す言葉——
たとへば全(quan)・並(bing)——を「不」「没」の上に添へて、
全面的に否定する場合がある。そしてこの用法を時代的に溯らせて
行くと古く六朝人の書いたものに見出され、殊に多い用例は「都無
(dou wu)」・「都無(dou wu)」であつて、中でも「世説」に
顕著だと指摘された。

知られる如く「世説」は、六朝期の宋の臨川王劉義慶(AD403~
444)により著はされたもので、のち梁の劉孝標が注を加えた。伝へ
られる所では十巻といはれるが、今日残つてゐるものは「世説新語」
三巻である。その改編・改名の経過に関しては必ずしも明白ではな
い。「世説」は六朝時代における逸話集の白眉とされ、竹林七賢や
東晋の貴顕紳士たちの言行が簡潔な文章のうちに活写されてゐる、後
世多くの読者を獲得してゐる理由も首肯できる。かうした「世説」
の我国への渡来がいつ頃であつたのか、その時日は詳かにしない。
時代は稍下るが例の藤原佐世の「日本国現在書目録」中の「卅二小
説家」に「世説十撰宋臨川王劉義慶撰。劉孝標注」と見え、その上限は不明としても
まづ奈良時代に舶載せられ以後江戸時代に至る歴史を持つており、

その間かなりの様々の影響を受けたであろうことが思はれる。

この「世説」において定着をみた否定強調の語法は、同じく吉川博士の御指摘によれば「後漢時代には、専ら口語として行はれてゐたものが、魏晉時代の口語愛好の風潮と共に、急に文章の表に躍り出た」⁽⁴⁾ものであつて、まことに文章語としてはユニークな助字の出現とみなげなければならない。

二

上に見て来た如く、この種の否定表記における最も頻度数の高い使用例は「都^か不^か」「都^か無^か」といふことであるが、我國の上代作品中で所謂「記紀万葉」と呼ぶ代表的著作の何れにも見出すことの出来るのは、「都^か不^か」の場合だけである。即ち「古事記」にあつては上巻に、

都^か不^か得^か一魚(都^かつて一つの魚も得たまはず)古事記大成本文篇訓)

また同じく中巻応神天皇記に

都^か不^か知^か執^か楫^か而立^か船(都^かつて楫を執りて船に立ちまをるを知らず)

の二例を見、「日本書紀」では皇極紀三年三月(巻二十四)条に、

明日往見都^か不^か在^か焉(明日日往きて見るに都^かつてなし)朝日古典全集訓)と見え、「万葉集」では六七五(巻四)に、

娘子部四 咲沢二生流 花勝負 都^か毛^か不^か知 恋愛措可聞(をみなへし)さきまはにおふる はなかつみ かつてもしらぬ こひもするかも)

とあり、この「都^か」と「不^か」との間に「毛^か」を挿入してゐる表記は、他に類例を見ないものである。同じく三三〇八(巻十三)に、

天地之 神尾母吾者 禱而寸 恋云物者 都^か不^か止^か來

(あめつちの かみをもあれは いのりてき こひといふものは かつてやまずけり)

とある。この最終句に含まれた「都^か不^か」の訓は、上記のもの以外に「さね、やまずけり」とするケースもあつて決定をみないが、これについては後に触れる機会がある。

なほ「記紀万葉」以外に管見に入つたものとしては「寧楽遺文」所収の「人々啓状」(三例)・「日本靈異記中巻第廿四話」(一例)がある。

次に「都^か無^か」の場合は「古事記」「万葉集」に見えず「日本書紀」に多く見出される。即ち神代紀上(巻一)に

都^か無^か所見(都^かに見ゆる所なし)

武烈紀前紀十一年八月(巻十六)条に

都^か無^か臣節(都^かつて臣節をなかりき)

欽明紀五年三月(巻十九)条に二例、

都^か無^か怖^か畏(都^かつておそるるところなし)

都^か無^か所憚(都^かつておそるるところなし)

孝徳紀大化元年(巻二十五)条に、

都^か無^か正語正見(都^かつて正しく語り正しく見るところなくして)

等であるが、「都^か無^か」の用例の特色は「風土記」の中に見ることの出来る点である。「常陸風土記」香島郡条に、

時都^か無^か水(都^かつて水なかりき)

「出雲風土記」神戸里条に、

都^か無^か芝(都^かつて芝なし)

の二例である。このほかに「寧楽遺文」中の「写経所公文」「東大寺奴婢帳」各一例、「日本靈異記下巻第十話・第廿四話・第卅九話」三例等をあはせ考へると、やはり「都^か不^か」と同様かなり一般化してゐたと思はれる。

三

同じ否定強調でも「都不」「都無」ほどに「世説」の中で顕著であるとはいへないかも知れないが、「曾不」「曾無」といふ使ひ方に注目したい。「曾」は本来「し」たことがある」といふ意味内容を持った言葉であるが、「不」や「無」と結びついた場合には「都」のそれと等しく、意味を強めるものとして用ゐられてゐることが多いと考へる。中国語にあつては両者の相違を発音により区別をつけてゐるといふ。即ち「以前に」といふ意味の時は *oeng* と発音し、「結局、たうとう」といふ「乃」(*na*)、「竟」(*jing*)と同じ意味の時は *zeng* と発音してゐる——必ずしも厳密なものではないやうであるが、一応のさうした使ひ分けはあるといへる。

所でこの「曾不」について吉川博士は、意味を強める場合の「曾」を添へた言ひ方は「詩に見えるパーセンテージが最も多い」と指摘された。その直接の影響と断定することは問題であらうが、「万葉集」中に三例を数へるのはさうした傾向の存在をみる思ひがするのである。

即ち一〇六九(巻七)に、

常者曾 不念物乎 此月之 過匿卷 惜夕香袋

(帯はかつて 念はぬものを この月の 過ぎ隠れまく 惜しき夕かも)

また一九四六(巻十)に、

木高者 曾木不殖 霍公鳥 来鳴令響而 恋令益

(木高者は かつて木殖えじ 霍公鳥 来鳴きとよめて 恋ひまさらしむ)

この「曾木不殖」といふ表記はいかに日本人の漢文らしく間のびした印象を与へる。また三〇八〇(巻十二)に、

海若之 奥爾生有 繩乘乃 名者曾不告 恋者雖死

(わたつみの 沖に生ひたる 繩客の 名はかつて告らし 恋ひは死ぬとも)

とある。散文では「日本書紀」に四例ほど見る。その中の三例は何れも共通したものを持って居り、あるひは一種の成句的なケースとして理解できるのであらうか。即ち神武紀前紀三年夏四月(巻三)条に、

曾不血刃虜必自敗矣

(曾て及血ぬらずして虜必ず自ら敗れなむ)

また景行紀十二年十二月(巻七)条に、

曾不血刃賊必自敗

(曾て及血ぬらずして賊必ず自ら敗れなむ)

また仲哀紀八年秋九月(巻八)条に、

曾不血刃其國必自服矣

(曾て及に血ぬらずしてかの國必ず自らまつるひなむ)

の如くである。残る一例は顯宗紀元年秋八月(巻十五)条に、
天皇与億計曾不蒙遇白髮天皇厚寵殊恩豈臨宝位

(天皇と億計とは、いむさまに、白髮の天皇の厚き寵、殊なる恩にあはざらましかば、あに宝位に臨むべしや。)

とみえるものであるが、築島裕博士はこの「いむさまに」といふ訓は更に皇極紀の一例とあはせて、「日本書紀古訓だけに存する特異な表現」として指摘されてゐる。それは「かつて」と訓じて単に強調の意味を持つものと解した場合と、明らかに意味を異にする意識の働いてゐたことを証するものではないだらうか。いつてみれば中国語における *oeng* と *zeng* の相違を訓により区別した、とみられなくもないやうに思はれるのである。

以上のほか「日本書紀中巻第十五話」中に二例をみる。

次に「曾無」は「曾不」と同様に用例は「日本書紀」と「万葉集」
とに集中してゐる。即ち神代紀上一書第三(巻一)に、

曾無息時(かつて息む時なし)

また神代紀下(巻二)に、

曾無靡絶(かつてやむことなし)

また武烈紀前紀十一年十二月(巻十六)条に、

曾無与二(かつて二ところなし)

とあり、「万葉集」では歌の本文中にみえるものとしては三八一〇

(巻十六)に、

味飯乎 水爾釀成 吾待之 代者曾無 直爾之不有者

うまいひを 水にかみなし わが待ちし 代はかつてなし ただにしあらねば

といふ一例のみで、後は散文部分である。山上憶良の「沈痾自哀

文」(巻五)に、

曾無作惡之心(かつて悪を作す心なし)

曾無減差(かつて減差ゆることなし)

とあるが、憶良の文章における引用漢籍の類は「六朝から唐代にかけて中国の読書人階級と言ふよりもそれ以下の階級に行はれた極く通俗な書物」といはれ、従つてこの「沈痾自哀文」は「当時の俗文」といふ神田博士の御指摘の方向から「曾無」使用のありやうを知ることが出来さうである。三八五七(巻十六)の左注に、

覺寤探抱曾無触手

(おどろきて探り抱くに、かつて手に触ることなし)

また四一三二・三三三の大伴池主「更來贈歌二首」の詞書に、

乗月徘徊曾無所為

(月に乘じて徘徊し、かつてなす所なし)

とある。これらの外には「學業遺文」所収の「唐大和上東征伝」中に一例をみる。

ここで少し考へておきたいことがある。それは「都不」「曾不」「曾無」の「万葉集」の歌の表記に用ゐられた時、「かつて」と訓じては字余りになるので「さね」と読んで歌の調べをととのへたい、とする見解のあることである。三三〇八・一〇六九・三〇八〇・三八一〇等がそれらに当るわけであるが、「さね」といふ言葉が必ずいつも否定形を伴ふこと、その意味も強調のそれであると考へられることから佐竹昭広氏はその共通性を認めておられる。しかし「さね——打消」の型をみるのは歌の本文中だけであり、「都不」「曾不」「曾無」は散文にも多く見出すことを思ふと、両者を全く同一のものとするのには問題が残るとしなくてはならないのではないか。

四

以上の事柄から帰納できる特色の一つに「日本書紀」の持つ綜合性といった面が濃い、といふことが理解される。つまり「都不」「都無」「曾不」「曾無」の何れをも含みめる点で他の作品との差を明らかにしてゐることである。そして更にそれらの方向に拍車をかけるものとして他に用例をみない「並不」「全不」の存在がある。初めに記したやうにこの「並不」「全不」を附した否定強調は今日の口語において用ゐられてゐるのであり、当時にあつては最も新しい型と言はれ得るであらう。

天武紀上巻元年秋七月二十三日(巻二十八)条に、

近江軍当諸道而多至即並不能相戦以解退

近江の軍、諸の道に当りて多く至る。並にあり戦ふことあたはざるをもちて解き退きまといふ一例をみるだけであるが、「並不」は「世説新語」においても二例しかなく「全不」と共に「日本書紀」の表記の新しさを証するものと思はれる。

ところで、「全不」は「世説新語」にもその例をみないものである。

皇極紀二年秋七月（卷二十四）条に、

送群卿物亦全不将来（群、卿に送る物は、全まるこず）

また孝徳紀大化四年秋七月（卷二十五）条に、

凡此五人経六日六夜而全不食飯

（凡そ此の五人、六日六夜を経て、全もの食はざりき）

また斉明紀四年十一月（卷二十六）条に、

天与赤兄知吾全不解（天と赤兄と知る、吾全しらず）

の三例は、従ってかなり珍しいケースである。

かうした事どもに關聯して思ひあはされるのは、「日本書紀」に用ゐられた字音仮名のきはだった特徴に注目し「推古式」から「古事記・万葉式」へ、そして「日本書紀式」に至る経路を考察、「日本書紀」では当時最も新しい北方音が採用せられた、といふ大野晋氏の御指摘である。すすんで氏はそのやうな中国音に忠実であらうとした態度は在来の日本人のものではなく、中国人の力が大きく働いてゐたことは十分に推測されると言はれた。この面から考へるとき、「並不」や「全不」の使用もまことに当然なものとみることが出来るであらう。

近時「日本書紀」各巻の筆録者について研究されつつあるが、た

とへば上記の極めて新しいと思はれる否定強調の用法の見られるものが、比較の後半の巻々に集まつてゐるのも或る傾向を示すことになるのであらうか。

——これまで否定強調の代表的な用法を我国上代の主要な作品の中に見て来た。それらの外に「世説新語」に見えるものとして

終不（日本書紀（二例）・日本靈異記（三例）・懷風藻（二例）

遂不（懷風藻（二例）

猶不（懷風藻（二例）

必不（古事記（二例）

などが挙げられる。

見て来たところはまことに微少な一用法に過ぎないものであるが、それでも中国との影響関係の時間的に早いもののあることを知り得た。この方面の検討の中から新しい視角を見つけたいただきたいものである。

(1) 『万葉集は支那人が書いたか』読貂『国語国文昭和二十七年一月など。

(2) 「上代日本文学と中国文学」上・中巻（瑞書房）など。

(3) 「中国散文論」（弘文堂）所収。

(4) (3)に同じ。

(5) (3)に同じ。

(6) 「平安時代の漢文訓読につきての研究」（東京大学出版会）

第二章第三節。

（四十三頁へつづく）